「諸関係の脱人間化」と「人間の形成」*

── 戦後のアドルノと「社会学のアクチュアリティー」──

表　　弘一郎

はじめに

没後50年を過ぎた現在，Th. W. アドルノ（1903-69）の思想は思想史の対象として検討可能な時期に至ったのかもしれない。アドルノやM. ホルクハイマーらがかつて構想したいわゆる大文字の「批判理論」は，もちろんJ. ハーバーマスはなお健在であるものの，小文字の「批判的社会理論」となって，A. ホネットやA. ヴェルマーなど（いわゆる「第3世代」），さらにはR. フォアストやR. イェッギなど（「第4世代」）をめぐって多様な議論が蓄積されている(1)。となれば，アドルノ思想に言及する際，まずはその史的意味がより問われるべき事柄となっていると言えよう(2)。ハーバーマスとアドルノとの連続と断絶，ホネットによるアドルノ批判と近年の再評価など，「批判理論」内部(3) でのテーマは尽きないが，本論文では第二次世界大戦後のアドルノに照準しよう。なぜなら，西ドイツに帰国後20年間（1949-69）のアドルノの活動は，一方でいわゆる「フランクフルト学派」の印象と実質を構築し，他方で西ドイツの知的再建（Wiederaufbau）に確かに寄与したと考えられているからである。戦後のアドルノ，特に1950年代のアドルノの活動には，晩年には影を潜めるある種の能動性と肯定性が見られる。ここでは，1950年代初頭（とりわけハッカー財団の調査主任を退き，1953年に哲学と社会学の定員枠内の員外教授になるまで）のアドルノに議論を限定して，灰塵に帰した社会の復興と，その中で紡がれたアドルノの思考と活動の意義を再検討しよう。その際，アドルノ遺稿集の『講演録』（Adorno 2019）(4) に収録された講演を検討の対象に加えよう。これらの作業を通じて，戦後ドイツにおいて「社会学」がいかなる意味を持ちえたか，さらには「カタストロフの後の社会の復興」にアドルノがどのように向き合ったかを明らかにし，なおかつ晩年に即してしばしば語られる傾向があるアドルノ像（否定性に留まり，安易な実践に与しない知識人等のイメージ）とは異なる相貌を浮かび上がらせることが，本論文の狙いである(5)。

第1節ではヨーロッパに帰還したアドルノの印象を書簡と日記から再構成し，第2節では

* 本誌の匿名のレフェリーの方々からいただいた貴重なご助言に感謝いたします。

1950 年代初頭のアドルノの活動を社会研究所の再建を背景に概観しよう。第 3 節では当時の講演「社会学のアクチュアリティー」を詳細に検討しよう。第 4 節では戦後におけるホルクハイマーの学際的プロジェクト構想の変容に対して，この講演がどのように位置付けられうるか，若干の試論を述べよう。

1. 亡命からの帰還 ── ヨーロッパの再-表象

1949 年 10 月，アドルノが 15 年間に渡る亡命生活から帰還を果たした。ドイツ連邦共和国基本法が制定されて約 5 ヶ月後，アデナウアーが連邦初代首相に選出された翌月，グローテヴォールがドイツ民主共和国の初代首相に選出された同月の事である。当時，ホルクハイマーは帰還に慎重な態度を取っていたため，彼が担当予定だった「社会の理論（Theorie der Gesellschaft）」── それはのちのアドルノの社会理論の原型と見てよいのだが ── の代講を行なうための帰還であった。日記をつける習慣のなかったアドルノだったが，ロサンゼルス出発からフランクフルトに到着し初回講義後の印象までを記した「大旅行日記（Tagebuch der großen Reise）」が残されており，「ヨーロッパ」に戻った喜びとともに，いわゆる「零時刻（Stunde Null）」，「崩壊（Zusammenbruch）」の後を生きる人びとの様子が記されている（Adorno（2003a））。

1-1.「人間的なもの」と「歴史的に有罪判決を受けたもの」

1949 年 10 月 28 日，ロサンゼルスを出発して 17 日後，アドルノはクイーン・エリザベス号でヨーロッパに到着した。オックスフォード大学に不本意な「研究生」として在籍してから，ニューヨークを経てロサンゼルスに仮寓し 15 年が経過していた[(6)]。プロムナードデッキからブルターニュ入港を眺めていたアドルノはこのように記している。「淡いにもかかわらずきわめてはっきりとした感情；アメリカにいる時の感情とは全く異なる」（Adorno（2003a）101）[(7)]。パリに移動したアドルノは「通りや建物の名前が私に働きかけてきた。ヘルダーリンならヘリコーンやパルナスをありありと思い浮かべただろう」（Adorno（2003a）102）と記している。パリのコンコルド広場では一人叫んだ（ebd.）。

アドルノにヨーロッパ帰還を決意させた要因としてしばしば指摘されるのは言語だが（GS10.2「ドイツ的とは何かという問いに答えて」），パリでも彼は昔のように目的もなく長時間散策し「人々の優雅さ，微笑み，人心地のつく言葉（die Humanisierende der Sprache）」を書き残している（ebd.）。

この日，アドルノはホルクハイマーに宛てて「ヨーロッパ帰還」の印象を次のように記している。

「ヨーロッパへの帰還は私を激しく捉え，書き記す言葉も見つからないほどでした。パリの美しさは貧しい服によって昔よりも感動的に光り輝いていました。他のものに適応しようとする救いのない試みは，ひょっとすると他のものをわずかに強調するのかもしれません。ここにまだあるものは，歴史的に有罪判決を受けており，そうした痕跡をはっきりと残していますが，非同時的なものですらなお存在しているという事実は歴史的な形象に属し，どこかしら人間的なものが，そうしたことすべてにもかかわらず生き延びているという微かな希望を秘めています」（AHB3，S.301）。

ほぼ同様の表現が大旅行日記にも見られる（「歴史的に有罪判決を受けているにもかかわらず，なお存在しているものという感情」）（Adorno（2003a）102）。

これに対してホルクハイマーは下記のように返信している（1949 年 11 月 2 日）。

「ヨーロッパに対するあなたの最初の反応を心から喜ばしく思います。あなたがそこで捉えられたという感情を私も毎日強く感じています。ドイツに降りかかっているものは，もちろん様々な災難には事欠かないでしょうけれども，あなたが容易には惑わされないことも存じています。あなたが〔ヨーロッパへ〕出発したことは正しいと思うことに変わりはありませんが，ただできれば私もあなたとともにそこにいたかったと思います」（AHB3，S.302）。

ヨーロッパへの帰還に心揺さぶられるアドルノに共感を示しつつも，ホルクハイマーが若干の留保を付していることが読み取れる。なお，この手紙には，早くも社会研究所再建に関する実務的な追伸（用地の問題など）が付されている（AHB3，S.303-304）。

1-2. 卑屈さと「主体への向け直し」

フランクフルトでは，大学の向かいにある「ペンション・ツェッペリン」に逗留した。街と人びとの印象を彼はこのように記している。大学周辺のヴェステントの家々には破壊されたものもあれば，焼け落ちたものもある。

「こうした家々がすぐに想起させるのは，中断である。歴史を失い，突然のことであり，衝撃に満ちたものを表している。人びとは卑屈で熱心すぎるし，つねに防衛的でなんでも他人のせいにする準備ができている。なるほど，かつてはナチスのような大権力の召使いだったのだ」（Adorno（2003a）106）。

16 年ぶりに教壇に立ったアドルノが抱いた学生たちの印象は素晴らしいものだったようだ。

「社会理論」講義の開講 3 日後の学生たちの印象を彼はこのように記している（11 月 10 日）[8]。

> 「学生たちから受けた最初の印象は，素晴らしいものだった。きわめて真面目で熱心で熱中している。もちろん，知性と教養のおそるべき断絶もある。アリストテレスについてのゼミには約 30 名が出席していたが，2 名しか『政治学』について知っておらず，しかもほとんど断片的な知識しか持っていなかったので，私自身が説明しなければならなかった。しかもイデア論抜きだ」（Adorno（2003a）108）。

この学生たちは 1927 年から 29 年あたりの生まれ，「高射砲世代」と総称されるハーバーマスや N. ルーマンの世代と推察される。S. ミュラー＝ドゥームもこの時期の学生たちの知的好奇心と熱烈さを記している（Müller-Doohm（2003）501-503，415-417 頁）。

こうした印象からは後のこと，1950 年代末から 1960 年代にかけてのことにはなるが，教育に関するアドルノの講演（「過去の総括とは何を意味するのか」（1959 秋），「教職を支配するタブー」（1965.5.21），「アウシュヴィッツ以後の教育」（1966.4.18））を参照しておこう[9]。彼の教育論は，他律，すなわち「個人が自らの理性に対してその責任を負わない掟や規範に隷従している」（Adorno（1970）92-93，130 頁）状態を脱して自律を促す教育，すなわち「反省し，自分で決定し，人に同調しない力」（Adorno（1970）93，130 頁）を涵養する教育を目指すものであった。そうして，ファシズムの悲惨を繰り返さないよう，「民衆の自律（Mündigkeit）の現れ」（Adorno（1970）15，18 頁）としての民主主義を実現する政治教育こそが，アドルノの強調するところだったと考えてよいだろう。むろん，アドルノは民主主義に全幅の信頼を置いていたわけではなく，議会制民主主義への懐疑も表明している（Adorno（1970）15-16，18 頁）。しかしながら，「〈主体への向け直し〉」[10]（Adorno（1970）90，126 頁）と「批判的な自己反省への教育」（Adorno（1970）90，127 頁）を通じてのみ，人類の野蛮化を阻止し，生き延びることを可能にするとアドルノは考えていた。学校は，そうした生存に役立たねばならないと明言している。「現状のただなかにあっては，唯一学校のみが，自覚があれば人類の非野蛮化を目指して直接努力できる」（Adorno（1970）86，121 頁）のである。

本節冒頭で述べたような，「崩壊」という状況認識をアドルノ自身は持っていなかった。アドルノの戦後認識は「社会学のアクチュアリティー」の講演用メモ書きに明瞭に見て取れる。そこでは，「全面的な崩壊」という表現を訂正して，「始まり，戦後問題の内的連関」と書き付けている（Adorno（2019）509）。「崩壊」は戦後に頻出した表現だが，あえて強調すれば，終戦を零地点として捉え戦争責任を他人事として他者に帰責する「崩壊」ではなく，終戦は戦争責任などの戦後の諸問題の「始まり」であり，そこにこそ社会学の役割があるとアドルノは考えていたと解釈できるだろう。この点では，上記の彼の教育論と社会学とは呼応しているのである[11]。それ

では，まず 1950 年代初頭のアドルノの活動を概観し，彼の「社会学」理解とその構想を明らかにしよう。

2. 1950 年代初頭のアドルノ ── 社会研究所の再建と言論活動

西ドイツ建国直後の 1950 年代初頭は「〔産業社会への農業セクターの統合やモータリゼーションの進展，教会との結びつきの弱体化，多様なイノベーションへの適応といった〕『近代化』がさまざまな領域で進行していった変革の時期」（安野（2005）278）だと言われる。いわゆる「経済の奇跡（Wirtschaftswunder）」が始まった時代でもあった。W. オイケンや A. リュストウら戦間期のオルド自由主義をその主柱とする社会的市場経済の体現である「経済の奇跡」を主導したエアハルトは，奇しくもアドルノと同じく F. オッペンハイマーのゼミ生[12] であった。

2-1. 社会研究所の再建

「市民の大学」として創設されたフランクフルト大学に附設された社会研究所は，戦後になってユネスコ研究所として再建される可能性が一時存在した。だが，R. ケーニヒや H. シェルスキーら同時代の社会学者たちとは，ユネスコ研究所の設置をめぐる攻防があった（Demirović（1999）310-316，91-97 頁）。彼らが率いた研究者集団は社会学史においてはそれぞれケルン学派やハンブルク学派などとラベリングされているが，むろんアドルノらの帰国直後からそのようなグループが形成されて対抗関係にあったわけではない。むしろ「〔ユネスコ研究所の設置をめぐる〕この争いのなかで，シェルスキー，ケーニヒ，批判理論の三つの核の周りに学問政治上の党派ができ，その間に対立の構図が生じた。それらの党派はそれからのちもまた何度も衝突することとなる。…。実証主義論争は単に，社会学でのこの長い主導権争いが最高点に達し，外に分かるようになったということだった」（Demirović（1999）325-326，106-107 頁）。

Demirović（1999）によれば，「既に 1951 年 2 月の時点で，フランクフルト社会研究所がユネスコ研究所として承認される見込みは薄くなってきた」（Demirović（1999）313，94 頁）。フランクフルト社会研究所は一時，新築される建物の 1 フロアをユネスコ研究所のために確保することを内諾したが，様々な政治的駆け引きの末に，結果としてユネスコ研究所は 1951 年 6 月にケルンに設置されることになった（Demirović（1999）325，106 頁）。社会研究所（IfS）は 1951 年 11 月 14 日に再建された（Adorno（2019）597）[13]。

2-2. 1950 年代の言論活動

では，こうした攻防が繰り広げられていた頃，アドルノはどのような言論活動を展開していたのだろうか。1950 年代のテクストを概観し，アドルノ遺稿集『講演録』（2019）を見れば，ある

程度の様相は明らかになるだろう。前者については，本論文末尾の「資料：1950 年代のテクスト群」を参照されたい。後者に収録されている講演は以下である。

「都市建築と社会秩序」（1949.12.9）[14]
「社会学のアクチュアリティー」（1951.2.23）
「プルーストに寄せて」（1953.11.12，1954.1，1954.2.5，1955.5.14）
「新音楽への導入のために」（1954.6.29）
「今日の個人と社会の関係について」（1957.2.13）
「文化（Kultur）と文化（Culture）」（1957.9.10）
「学生と彼らの期待への教育目標の依存」（1957.7.12）
「今日の人間的な社会」（1957.10.16）
「音楽批評の諸問題」（1958.3.6）

以上から，次節で「社会学のアクチュアリティー」に照準する理由は少なくとも 3 つある。第一に，この頃，アドルノは『ミニマ・モラリア』の出版によって帰国直後にもかかわらず早くも成功を収めていた（Müller-Doohm（2003）494，409 頁）ため，世論の注目度が相対的に高かったと考えられるからである。実際，編者によると，当時 3 紙がこの講演を取り上げ（オーバーヘッセン新聞（2 月 26 日），マールブルク新聞（2 月 27 日），ノイエ・ツァイトゥング（2 月 27 日）），マールブルク新聞は（その所属が社会科学研究所（Institut für Sozialwisssenschaften）という誤記はあるが）アドルノのことを的確に紹介している（Adorno（2019）596）。第二に，『権威主義的パーソナリティ』（1950）等の出版によって，アドルノが実質的に社会学者としても認知されはじめたと考えられるためである[15]。第三に，明らかに 1950 年代初頭のアドルノの言論活動は，ドイツ社会の現状や民主化に積極的に関与するものが多く，そのうち多数を経験的社会調査（とその紹介）が占めていたと考えられるからである。

3. 講演「社会学のアクチュアリティー」

「社会学のアクチュアリティー」（1951 年 2 月 23 日）は，マールブルク大学で行なわれた「政治的なものの社会学」をテーマとした，学生の研究会での講演である（Adorno（2019）596）。この講演を行なった頃，アドルノは「ダルムシュタット・ゲマインデ研究（Darmstädte Gemeindestudie）」や「グループ実験（Gruppenexperiment）」に参加し，フランクフルト大学では初めて社会学の授業を担当した（1950 / 51　冬学期，経験的研究作業についての討論（ホルクハイマーとの合同授業））。これは，社会学分野ではアドルノが帰還する由縁となった「社会

の理論」講義以来の授業である。

3-1.「哲学のアクチュアリティー」から「社会学のアクチュアリティー」へ

ハイデガーの「泥棒（Fassadenkletterer）」という比喩を，アドルノは二度用いている。最初は「哲学のアクチュアリティー」（1931）において，二度目は「社会学のアクチュアリティー」（1951）において。20 年後に同一の比喩が登場しているのはなぜなのだろうか[16]。「哲学のアクチュアリティー」において，アドルノは「〔社会学者が〕外側から壁をよじ登り，手の届く限りのものを掠めてゆく」というハイデガーのこの比喩[17] を認めると明言し，むしろ「哲学に対する社会学の役割を好意的に説明したい」と述べている（GS1，S.340，29 頁）。すなわち，「社会学は，意図を欠いた微細な要素，それでいて哲学の素材と結びついた諸要素を，析出させている」（ebd.）のであり，老朽化した大きな家から社会学が救出した諸要素に対して哲学は解釈を施すのである。

W. ベンヤミンに依拠しながらハイデガー哲学を批判して自らの哲学的立場を明瞭にした就任講演において，社会学はこのように半分は道具的にその存在を認められつつも，半分はその役割を限定されている。そこに 1920 年代社会学の残響[18] を看取することは可能だろうが，むしろ社会学はアドルノ自身の哲学的立場（「哲学の抹消」以後の「哲学的解釈という理念」の意義（GS1，S.339，28 頁））を打ち出す足がかりと見てよい。

ところが，「社会学のアクチュアリティー」において，アドルノはこの比喩を「公正ではない（illoyal）」と明言し，真理を伝えてはいないと言う。哲学の仕事は，「哲学の問題圏がその固有の中心において社会諸関係と衝突するという直観」にあるのであり，社会の諸問題を外側から倫理学や認識論の諸問題に持ち込まなければならないといったものではないという（Adorno（2019）34）。そうして，たとえばカント哲学を 18 世紀後半のプロイセン官僚制（Beamtentum）の特有の社会的状況から導出するといったような，いわゆる知識社会学の試みには憤りを否定できないと述べる（ebd.）[19]。

社会学のアクチュアリティーは，精神科学の問題設定や哲学と社会学との関係や哲学の具体化といった使命などにあるのではなく，（現在のドイツの状況が社会科学の研究を必要としている現実を無視するならば）私たちの学問のきわめて理念的な把握にすらあると言う。（Adorno（2019）34-35）。

> 「…〔自由放任の原理などとは異なり〕社会学は，現在眼前にあるドイツの諸問題の領域における理性的計画の唯一学問的な組織であり，まさにこの点では，社会の自己省察（Selbstbesinnug）への哲学的要請と，こう言ってよければ，今日現実に生じている事柄を社会の様々な必要性に応じて測定することへの物質的要請との直接的な一致を支配している

のです」（Adorno（2019）35）。

すなわち，社会学は，一方で「社会の自己省察」（Adorno（2019）32）と，他方でまさに戦後の状況下で必要とされている事柄に，その必要の度合いに応じて計画的に取り組んでいく試みとの一致と捉えられていると言えよう[20]。前者の社会の自己省察に対しては，国家社会主義者たちが深い不安を抱いた。それは，国家社会主義レジームを阻み，今日，アドルノの確信では別の全体主義的システム[21]によって同様に阻まれ，表象を超えるカタストロフがすべてをその元に埋め込む前に，ついには人間の尊厳に相応しい（menschenwürdig）社会のようなものになお集う前提を作り上げるもの，と言われている（ebd.）。

「社会の自己省察」[22]をこのように高く（後には見られないほど肯定的に）評価するのは，アドルノが根差す哲学の伝統からすれば自然なものである。ただ，自己省察をドイツ観念論のように主観に帰すのではなく社会それ自身に帰し，なおかつ戦後ドイツ社会の現実の要請に即して（経験的方法を用いて）展開することに社会学の意義を見出している点はおそらく戦間期のアドルノには見られないものである。これは，ハイデガーの比喩の捉え直しと同様，この時期のアドルノに特徴的な思考と言ってよいだろう。

3-2. 社会学とドイツの諸問題

社会学が取り組むべきドイツの諸問題として，具体的にアドルノは3つの問題を挙げている。すなわち，（第三帝国支配下の東方からの）避難民問題，住宅問題，そして社会学と政治学との関係である（Adorno（2019）35-37）。

避難民問題は，避難民のことを客観的にも主観的にも知る必要があることをすべて知った時にのみ解決できる，と言う（S.35）。この講演では個々の問題に立ち入ってはいないが，避難民においては個別の利益の直接性の方が全体の利益（広い意味での政治的利益）に優先することが明らかになっていると述べる（ebd.）。避難民問題に現れている，政治からの疎外という現象，再私有化（Reprivatisierung）という問題はいわば現代の大衆社会の裏面を表しており，こうした現代の主要な問題がまさに避難民においてとりわけ劇的なあり方で見出されると言う（Adorno（2019）36）[23]。

同様の問題が物質的再建と住宅問題であり，アドルノは次の矛盾を考えるよう，聴講している学生たちに促す。すなわち，圧倒的な数の入居希望者に対する住宅の解決策として客観的に示されるもの，すなわち客観的な諸欲求を考慮した標準的な住宅と，他方で，もとは19世紀後半に由来する個人化された住まいの表象に強く固定された，入居希望者の主観的な好みとの矛盾である（ebd.）。こうした，客観的な諸々の欲求とその主観的な投影との矛盾の背後には，私たちの社会の根本的な諸問題が存するとアドルノは言う（ebd.）。この点でアドルノが例示しているの

は，「人間の意識が変化するのは，人間がそのもとに生きている事実上の社会関係よりもずっと遅い」（ebd.）点である。

社会学と政治学との関係は今日まさにアカデミックな議論一般の中心にあるとアドルノは言う（Adorno（2019）37）。「政治が，学問上の特別な取り扱いが相応しい特別な領域をなしているかどうかという問いに答えを与えるのは，それ自体がより広い意味で社会学の範囲にある」（ebd.）。職業としての政治は実際，現実の社会に対して独立しており，「政治」という職業上の特別な領域が存在しているが，人間の直接的な生きた生からの政治のこうした分離は，社会的現象として捉えるべき政治の別の社会的側面だと言う（ebd.）。こうした双方の問いは，哲学的に方向づけられ，経験的手法によって強く専門化した社会学の問題圏にあると，アドルノは言う（ebd.）。これらの問いは，社会科学（Gesellschaftswissenschaft）の哲学的背景であり，社会と政治の関係という問題は，社会学の哲学的アクチュアリティーにとって直接的なモデルを提供する（ebd.）。すなわち，そこで出発点になるのは「生が物のように硬化した概念上の鋳造物を，…意識の自己批判によって乗り越えるという使命」（ebd.）である。だが，制度的に硬化し疎外された生にたとえばロマンティックな形而上学をただ対置する場合には，こうした克服は可能ではないため，ここにこそ社会学の特筆すべき使命があるとアドルノは言う（ebd.）すなわち，社会学の使命とは，「人間には疎遠で，決定論的な観点では非人間的な世界として対置されるこの世界が，まさに同時に人間の世界であるという事実を，再び人間の意識にもたらすこと」，「〔この世界を〕人間と彼らの生きた諸関係に立ち返らせること」そして「〔この世界を〕最後には，こうした諸関係の形成と人間の形成（Gestaltung）そのものから変えうること」にある（Adorno（2019）37-38）。

ここで見るべきは，社会学の哲学的アクチュアリティーと社会学固有のアクチュアリティーとを弁別し，前者の哲学的アクチュアリティー，すなわち「意識の自己批判」という哲学の伝統的な方法の限界を踏まえながら，社会学の方法の固有性に注目を促している点である。いわば社会学とは，物象化した社会の克服の方途を社会関係の再形成可能性に即して具体的に提示しうる実践的な学問なのである。しかも，この時点での「人間の形成」という表現は，アドルノの社会学理解という点で述べれば，社会関係の再形成可能性よりもさらに踏み込んだものと言ってよいだろう[(24)]。

3-3. 経験的社会科学への期待と懸念

次にアドルノが投げかけるのは，社会学のアクチュアリティーとは言っても，どの社会学のアクチュアリティーなのか，という問いである（Adorno（2019）38）。彼自身もそのなかで育った伝統的なドイツ社会学[(25)]は，その思弁的な性質と（半分はその意志に則して，半分はその意志に反して）イデオロギー的にベールをかける働きのため，現在の現実の優勢な形態のもとではも

はや十分ではないとアドルノは言う（ebd.）。

では，そうした「事実からの疎外（Faktenfremdheit）」（ebd.）を乗り越えて，いかなる社会学がアクチュアリティーを有すと言うのか。アドルノは経験的社会科学に期待を抱いている。

> 「私はきわめて真面目にこのように思っています。経験的社会科学は，もし発展してゆくならば，全体主義的な妄想が，どのような形であれ，人間たちをもう一度とらまえてしまう事態を防ぐことができる，最も重要な対抗力（Gegenkräfte）に属するのです」（S.40）。

もっとも，アドルノは経験的調査（この箇所では『権威主義的パーソナリティ』を紹介している）をこのようにただ高く評価しただけではない。彼は，「概念なき経験主義の危険」について2点にわたり指摘している（S.42-44）。第一に，社会研究所も経験的研究を行なっているがゆえに，とりわけ自己に批判の眼差しを向ける真理が必要となる（S.43）点，すなわち「概念なき調査（Erhebungen）の危険性」である。第二に，全体性や真理との関係を犠牲にして，社会学のなかでも，プラグマティックな，実践的なエレメント（管理テクノロジーや社会保障の諸問題）に抽象化される危険性である（S.44）。

興味深いことに，アドルノはR. リンドに参照を促しながら，アメリカ的（調査）方法はアメリカにおいてすら大いに疑念を招いているのに，ドイツでアメリカ的方法を実施すると現実的に危ういと述べる（ebd.）[26]。つまるところ，

> 「社会における本質はおのずから，直接的に物のように掴み出せるものではなく，単なる諸々の事実を超え出るが，他方で同時に諸々の事実によって満たされる，首尾一貫した思考によって初めて解明されるのです」（S.45）。

つまり，社会の本質を掴むには，諸事実を超え出る省察を必要とするだけでなく，同時に諸事実に依拠した経験的調査をも必要とし，両者は一体となった思考を要求するというのである。いわゆる社会学の両輪（理論と調査）に言及した，現在から見ればごくありふれた見解だが，これは何より先述した「社会の自己省察」を敷衍したものと考えてよいだろう。こうした見解は，しばしば社会理論に強調点を置いていたと見られる傾向のあるアドルノ像に修正を迫るものである。

さらにアドルノは，経験的社会調査（empirische Sozialforschung）が直面している問題として，次の2点を指摘している（Adorno（2019）45-47）。第一に社会的全体性の問題，第二に物象化の問題である。まず，社会的全体性は社会的媒介の問題だが，こうした媒介は無媒介に把握できるものではない（S.46）。彼が当時関与していたダルムシュタット・ゲマインデ研究の例を挙げて次のように言う。限定された社会的セクターの内部で諸制度と人間との関係を経験的調査

によって探究すると，この限定されたセクターの範囲内にとらわれるならば，「諸制度に対する人間の関係が，あたかも，人間が向き合っているセクターにおける諸制度の特性によって本質的に条件づけられているかのよう」（ebd.）に現れる，と述べる。アドルノは法廷を例に挙げて，ある都市の限定的な法廷が事件を調停する必要があるかどうかは，この特別な法廷がどのように機能しているかにかかっているのではなく，一般的に支配的な文化環境がどのように人間をあらかじめ形成している（präformieren）かにかかっている，と言う。アドルノは，こうした最も本質的なエレメント自体を含め入れて考えることによって，諸々のセクターのみに向けられた調査は最初から阻止されると述べる。反対に，ここで媒介を表現しているもの，すなわち全体性そのものは，発展した理論によってのみそもそも規定されうるが，（経験的）調査が関係している，経験的でまさに明快な諸々の切り抜き・断面の内部では規定されえない，と言う（S.46-47）。

第二の物象化については，「経験社会学の方法を通じて，必然的にそれ自体が物のように取り扱う（ein Dingfestmachen）ように条件づけられている」（S.47）という問題である。これは，「すべてが数えられ測られるように」なるという，定量的研究の不可避の性質である。これについてアドルノは，「経験的にコントロール可能な方法によって把握されるものはすべて，ある意味では物象化することになる」と言う（ebd.）。こうした物象化をアドルノは全面的に否定はしない。「他面では，まさにこうした物象化，物のように取り扱うという事実は社会学の本質的な関心事」と認めはする（ebd.）。そこには，「調査手法が，その調査手法によってそもそも初めて明らかにされうる，調査対象の諸現象に規定されている」（ebd.）という論理的な困難が潜んでいる。その一例として「プリンストン・ラジオ・リサーチ・プロジェクト」[27] が挙げられている（S.47-48）。

アドルノは，芸術音楽（ernste Musik）をラジオを通じてのみ知っている場合，芸術音楽とのこうした関係はバラバラで表面的であり，つまりは物象化されていると言う（S.48）。この仮説を何らかの方法で立証する必要があったため，プロジェクトのアシスタント，G. シンプソン[28] が専門家たちが称賛する作曲家のリストを作成し，こうした芸術音楽の作曲家たちがラジオを通じてのみ教養を得た聴き手と，別の音楽的教養もある聴き手にどの程度幅広く細分化されているか調査し，結果としてアドルノの仮説が立証された（ebd.）。

ここで問題となっている困難とは，こうした個別研究の困難ではなく，固有の意味連関の認識に対する経験的社会学の原理的な問題と関係がある。つまりは経験的社会学と社会の理論との緊張関係である（ebd.）。

3-4.「諸関係の脱人間化」の学問としての社会学

この講演には，1960 年代に主に議論されることになる，社会という概念と表象が早くも登場する。アドルノは，「ここで社会という概念を使ってよいならば，包括的な意味での社会という

対象は考えられる限り全てのディシプリンを包摂する」(S.49) と言う。そこで挙げられているのは，狭義の社会学，哲学，歴史学，心理学，民族学，文化人類学，数多くの個別の人文学などである（ebd.)。したがって，社会を対象とする社会学は，おのずと統一性を有することになる[29]。

「社会学は，他の科学との区別によって，いわゆる純粋社会学や抽象的社会学の領域に資するのではなく，すべての学問を統一し，テーマの重複を恐れるのではなく，現在の社会にとって根本的な生命過程の分析という観点のもとで統一するのです」(S.49-50)。

こうした統一性やテーマの重複という点で問題になりうるのは，人間を対象とする心理学との関係である。アドルノはG. ル・ボン[30] に言及しながら，社会学が人間的な，より正確には非合理的な行動様式を取り扱わねばならない限りで，社会学は，たとえば全体主義的な集団妄想（Massenwahn）のような社会現象の具体的認識に決定的に寄与する個人の心理学〔個人に照準する心理学〕をモデルに発展しなければならない，と言う（S.50)。すなわち，「有意味な社会心理学は，客観的な社会的諸条件の内部においてのみ妥当です」(ebd.)。

したがって，心理学と決定的に区別しながら，アドルノは社会学を次のように規定する。

「社会学が心理学から本質的に区別されるかぎり，重要なのは人間が社会的本質（geselliges Wesen）として根本的に個人として行動するということではなく，社会学は人間とその諸関係の学問にとどまらないということであり，むしろ人間の孤立，疎外，諸関係の脱人間化（Entmenschlichung）の学問でもある，ということです」(S.50-51)。

人間は確かに社会的存在だが，同時に「非合理的な行動様式」(S.50) をも有す存在である。したがって，心理学のように人間のみに照準するのではなく，人間であるがゆえに至りうる非人間的な状態，すなわち「諸関係の脱人間化」と，こうした脱人間化を可能にしてしまう諸条件をこそ分析し考究するのが社会学なのである。

それゆえ，社会学の対象は私たちの社会の客観的な基礎であり，とりわけそれによって今日の社会が生産され再生産される組織形態だと言う（S.51)。アドルノは，その例として官僚制や労働組合の問題を挙げている[31]。こうした客観的な諸契機は，「私たちの学問にとっては，現在社会学が広く取り違えている，諸個人や諸集団の社会的行動様式の観察よりもさらに重要」(ebd. 強調は引用者）とアドルノは主張する。ここでアドルノは，既存の社会学を批判して，ドイツ社会学の発展のために（Adorno（2019）517)，客観的な諸契機の分析の重要性を主張している。

では，人間の行動様式に影響を与える客観的な諸条件は変更可能なものなのだろうか。この講

演全体を通じて，この点に関してアドルノは楽観的である。

> 「社会学は，私が〔この講演で〕その理念を示そうと試みた意味では，原理的に人間とその行動にのみ関わるものではなく，人間の行動が依存している客観的な諸力にも関わります。その際重要なのは，軍隊や政党，教会といった既存の社会制度が人間に及ぼすいわゆる作用（Einwirkung）だけではなく，とりわけ，その集合性（Zusammenleben）において人間の頭の上を超えて働き，しかしながら他方で人間によって変えることもできる客観的メカニズムです」（S.51-52）。

ここで制度と客観的メカニズムとが明確に区別されて論じられている点に注意せねばならないが，後者の客観的メカニズムは「最終的には人間によって作られたものであるため」（S.52），変えることができると明言する。アドルノは思いこみ（Aberglaube）を例として挙げている。すなわち，投票や世論調査などに限定すると，政治的傾向をめぐって完全で十分なイメージが作られてしまいかねない（ebd.）。「重要なのは，人民（Volk）の政治的見解がどの方向へ動いているのかを知ることであり，経済的に最重要な位置を占めており，人びとの行動すらも広範囲に操作できる，鍵となる集団の利害関心と政治がどのようなものであるかを知れば，信頼できる予想を立てられる」（ebd.）と言う。ここでアドルノが念頭に置いているのは国家社会主義の時代だが，議論の対象は過去に限定されない。むしろ，ここまでの主張を踏まえると，アドルノはそうした過去を踏まえて，客観的メカニズムの変更可能性を積極的に論じようとしていると考えられる。政治的なものの社会学がこの講演のテーマだが，こうした現実政治の力学の分析をも具体的に示唆している点が特徴的である。

人間の行動様式と客観的な諸条件との関係で問われうるのが「理解」の問題である。アドルノは，こうした「相互作用の研究」という点で，ドイツ社会学において議論されてきた理解という理念の保持を示唆する（ebd.）。

> 「理解ということで，ジンメルがなお定式化したような，いわゆる主観的な意味，すなわち精神的な堅持（Festhalten）の把握だけが重要になるのではなく，こう言ってよければ，人間の主観的な行動様式によって表現される，客観的な合法則性の〔把握も〕重要になります」（ebd.）。

ここでアドルノは，明らかにヴェーバーの理解社会学を想起している[32]。後のアドルノの社会理論に登場することになるヴェーバーとデュルケムとの対照のうち，（やや素朴な表現とはいえ）ヴェーバーの理解概念が早くも登場している。

前節で取り上げた経験社会学の物象化の問題に，アドルノは最後に立ち返って次のように述べる。現在の社会の問題としての，物のような（dinghaft）方法と物象化の問題との矛盾はそれほど際立っているものでも抽象的なものでもない（S.52-53）。

> 「社会学は，こうした契機を乗り越える，新たな経験的方法をも発展させるよう尽力する必要があり，とりわけ，硬化した諸現象に対してダイナミクスを可視化できる方法，すなわち，ただ記録された諸事実の代わりに，学問的な専門分野の厳格さのもとで何かが失われるようなことなく，理解へと歩み入る方法を発展させるよう尽力する必要があります」（S.53）

と述べ，当時社会研究所が取り組んでいた「グループ実験」の紹介を行なっている（ebd.）。現在のドイツ人の意識を知るのに有効ではないかとするアドルノらの想定に対して，比較の可能性を欠いているとの反論があるかもしれない（ebd.）。だが，アドルノは，そこに社会学の経験的研究とドイツ的伝統の有意義な理論的エレメントとを結びつける必要性を（楽観的に“Bangemachen gilt nicht”）見ている（S.54）。結語でアドルノは，物象化された意識の研究を行なうだけでなく，そうした意識の克服を社会的洞察の固有の課題と呼びたい，と締め括る（ebd.）。

このように，客観的メカニズムの変更可能性だけでなく，物象化された方法とその克服についても，この講演はあくまで能動的かつ楽観的なのであった。

4. 学際的プロジェクトの変容 ── 社会哲学から哲学・社会学へ ──

「哲学のアクチュアリティー」は，ウィーンでの『アンブルッフ（Anbruch）』誌の編集が途絶し，二度目の教授資格取得後にいよいよ哲学者として出発したアドルノの方法論的デビュー講演であった。これに対して，「社会学のアクチュアリティー」は，亡命地でラザースフェルトらとの共同研究を通じて経験的社会調査の方法を体得し，最新の知見を携えてアメリカから帰国したアドルノの社会学者としてのデビュー講演と見なしてよいだろう。先述したように，ケーニヒやシェルスキーらが率いた同時代の社会学も念頭に置かれていたと考えられるが[33]，真理政治という観点から見ても，講演を行なった 1951 年 2 月の時点でユネスコ研究所の設置をめぐるケーニヒやシェルスキーらとの攻防はある程度決着を見ていたため，この講演が社会研究所の再建をめぐるプロモーションの類でなかったことも言うまでもない。

社会学のアクチュアリティーを社会と政治の関係に見出す点で，その視座はきわめて問題解決的であり，「戦後」という大問題への取り組みに向かうものであっただろう。この点は，講演冒頭の国家社会主義批判（Adorno（2019）30-32）に見られる通りである。

こうしたアドルノの「社会学」を，戦後ドイツ社会学のコンテクストと照らし合わせてみよう。山本（1986）は，1946 年のドイツ社会学会の再開[34] と L. v. ヴィーゼの会長就任に始まる「社会学の再建」後，戦後社会学の骨格形成を 1950 年代中頃と判断している（山本（1986）42）。1950 年代初頭の西ドイツでは，様々な学派が経験的社会調査を実施し，最先端のアプローチを謳っていたが（メビウス（2018）），アドルノもその例に漏れなかった。ただ，そうした社会調査を「社会の自己省察」という批判的観点と結合して展開していた点が，アドルノの際立った独自性と言えるだろう。アドルノの講演はまさに戦後の「社会学の再建」のただなかで，戦後ドイツ社会の現実を眼差しながら，最先端の経験的社会調査の可能性と問題点とを直視し，同時に理論的省察を加える，きわめて独自性の高い構想を打ち出しえたものと言えよう[35]。

こうした事柄を，より詳細にフランクフルト大学における社会学の制度化という観点から見てみよう。哲学部と経済・社会科学部との協働によって，1954/55 年の冬学期に哲学部における社会学専攻と社会研究所による社会学位授与規程（Diplomprüfungsordnung）が設けられた（Herrschaft（2010）224）。これは当時のドイツでは唯一の社会学の学位授与（Diplomstudiengang）だったが，「アドルノにとっては，...1951 年以来哲学部に設置された社会学のありようを，確かな制度化の道へ繋げる可能性を開くもの」（225）だった。この点について，Herrschaft（2010）はフランクフルト大学図書館資料センター所蔵の書簡類で後付けうると述べているが（ebd.），この講演もそうした素材のひとつと見てもよいだろう。強く解釈すれば，「哲学部における社会学」の正当化の道筋をつけようとするのがこの講演の目的のひとつだと捉えることもできよう。

ところで興味深いことに，同時期にホルクハイマーは担当講座名の変更を申請している。すなわち，ドイツ追放以前に担当していた「社会哲学」を哲学・社会学講座として定義するよう，改めて担当省庁に申請しているのである。デミロヴィッチによれば，その際の申請文書（1951 年 3 月 24 日）には次のような記述がある。

> 「...その後今日までに，講座をそのように命名する理由の多くが消滅してしまったのです。...。特に，社会哲学とは一体何を意味すべきであるのか，もはやだれも知ってはいないのです。...。哲学部のなかでは社会学は普遍的な精神的，理論的視点の一覧表を書きとめておかなくてはならないことは了承されています」（Demirović（1999）292-293，69-70 頁）。

「哲学・社会学」という講座名については戦術的な動機が決定的（心理学担当の A. ゲルプへの配慮[36]）だったとのことである。申請は 1951 年 6 月 23 日に認可された（Demirović（1999）292，302 頁）。

だが，おそらく戦術的な動機だけが決定的ではないと考えられる。ホルクハイマーが 1931 年の社会研究所所長就任講演（「社会哲学の現状と社会研究所の使命」）で打ち出した学際的プロ

ジェクトの構想を実現するための知的基盤が「社会哲学」だったとすれば，上記の申請文書に明示されているとおり，講座名変更の申請は，そうしたプロジェクトが戦間期に抱かれた当初の形ではもはや不可能だという認識を示している。したがって，「哲学・社会学」という分離と結合によって，一方では先述したアドルノの講演のように，最新の経験的研究によって現実の社会の分析を進め，他方では批判的観点によってそれらに反省を加えるプロジェクトが再出発したと捉えた方がより適切だろう[37]。ホルクハイマーは「…── 単なるお役所向けの文書においてすら ── 社会学を再び哲学と結びつけ，はっきりと，哲学と結びついた教育要求を示してもいたのである」（Demirović（1999）293，71 頁）とデミロヴィッチは解釈している。だが，哲学と社会学とを分離しつつ統合する作業を通じて「批判理論」の実質を形成したのは，実際には 1957 年に哲学と社会学の正教授になり，1958 年には社会研究所所長に就任したアドルノだったと考えられる[38]。

講演中に登場した「社会の自己省察」がこのプロジェクトの方法としてより明確にされたならば，後の「批判理論」が異なる姿になりえた可能性はある。ただ，アドルノが上記の哲学的方法を明確にした否定弁証法ではそうした自己省察は影を潜め，ありえた社会理論は「社会」（1965）であくまで否定的な形姿で描かれた。これらを成功した学際的プロジェクトと見做しうるかについては，見解が分かれている（批判の典型例としては Honneth（1985）を参照，アドルノ社会学の潜勢力を見ようとする例としては Müller-Doohm（1996）を参照）。だが，別様の学際的プロジェクトを想起することはできよう。そうしたありえた可能性を垣間見せるのが，先の講演であった。

お わ り に

1951 年の講演で，確かに社会学は 1960 年代のアドルノの社会理論に見られるような側面，すなわち諸個人を超えて作動する「客観的メカニズム」（Adorno（2019）51）の分析を含んでいるが，同時に，戦後ドイツ社会にとって切実な諸問題を解決するための実践的なアプローチとして経験的方法が位置付けられていたと言えよう。この点は当時アドルノが精力的に進めていた教育と同じ含意を持つものと見てよいかもしれない。

この講演が学生の研究会で行なわれたという事実[39] に注目するならば，学生の旺盛な向学心と探究心に応えたというだけではなく，アドルノが戦後の教育で取り組んだものと同様の方向性を看取できるだろう。特にアドルノの楽観的とも思えるメッセージは，戦後ドイツの若者（ハーバーマスやルーマンらの世代）に宛てたものと見ることもできる。社会関係の再形成可能性と「人間の形成」という大胆な表現は，国家社会主義時代を乗り越えうる可能性と，集団妄想といった人間集団の独特の機序と特性を克服する課題とを社会学に見出すものと捉えることもでき

る[40]。

社会学の可能性に対するアドルノの高い評価はこの時期に固有のものだろう。眩惑連関や管理された世界を打破し，より良き社会を形づくる可能性を社会学に見ることができたのは，第一に彼がアメリカからの経験的社会調査の紹介者であり，ダルムシュタット・ゲマインデ研究や「グループ実験」などを手がけている最中であったこと，さらにはドイツ社会自体が建国直後の流動的な状態であったこと等がその原因として考えられる（西ドイツの主権回復は1955年のパリ諸条約の発効によってである）。

したがって，社会学領域におけるこの時期のアドルノの活動は――確かに社会研究所の再建というコンテクストがあるとはいえ――戦後ドイツ社会学界におけるヘゲモニー争いと見るだけでは不十分である。灰塵のなかで生じた物質的欠乏と精神的空白を満たすものは何でありうるのか，それを明示する一助となりうるのが社会学であり，社会の再形成と客観的メカニズムの変更可能性，さらには「人間の形成」の可能性を示すのが社会学だったのである。経験的研究をともなう社会学という，戦後ドイツにとっての新しい学問は，とりわけこの時期にはより良き社会秩序を建設する可能性を明確に示すものであり，アドルノが体現した「社会学」もそのひとつだったと言えるだろう。

本論文は，資料類の検討が不十分であるため，ドイツ戦後史におけるアドルノ思想の位置付けに関して特段新たな知見を付け加えることはできない。ただ，行論を通じて以下のことは明らかになった。すなわち，戦後のハイデガー・オルタナティブになりえた『ミニマ・モラリア』だけではなく，アドルノの「社会学」は，いわゆる「崩壊」のような戦争責任回避の言説ではなく，「人間の形成」をともなう社会の再形成可能性を示し，「経済の奇跡」へ向かおうとする「近代化」の時期において，「社会の自己省察」を対置するものであっただろう。この点では，「カタストロフ後の社会の復興」というよりは，カタストロフをもたらした社会のありようへの自己反省の可能性を社会そのものに見出すものであった。そのことによって，アドルノの思想と社会研究所は，最新のアプローチを駆使しながら，戦後ドイツ社会のなかで徐々に根源的な批判を提起する立場と見られていくことになっただろう。

さらに，1951年の講演の後に，アドルノが西ドイツに定住して以降，こうした社会変革を志向する社会学の可能性がアドルノ思想のなかで後景に退いていった経緯を探索する必要があるだろう。1960年代には，自身の哲学的方法論をまとめるプロジェクト（『否定弁証法』）や美（学）をめぐるプロジェクト（『美の理論』），さらには社会理論の彫琢が始まった[41]。こうした複数のプロジェクトの進行のなかで，社会変革を志向する社会学の方向性がやや影を潜めた可能性はあるが，この点を検証するには，帰国後20年間（1949-69）の活動のなお慎重かつ詳細な探究が必要である。

しかしながら，急いで付け加えねばならないが，1960年代におけるアドルノの活動を「思弁へ

の後退」等と一蹴することはできない。なぜならば，彼は1968年の非常事態法（Notstandgesetz）の成立に抗い（GS20.1，S.396-397），結果的に最終講義となった「社会学講義」（1968年夏学期）の後でもなお，「弁証法的思考入門」と題された講義を行なう予定を立てていたからである。アドルノに対する学生の抗議と妨害によって中断された後，結果として不開講にせざるを得なくなったこの講義のメモ書き（1969年6月3日）の最後の箇所にはこうある。

> 「哲学とは様々な媒介を思考することである。これは忍耐を必要とする。哲学は，直接性への信仰を断念することを意味する」（Adorno（2000）177，下線は原文）。

客観に直接相対することは不可能である。だが，客観を掴み出す諸々の概念に反省を加えることは可能であり，そうした媒介を思考することが哲学の仕事である。その点で，哲学の中心に位置するのは，「体系」ではなく「開かれた思考」（Adorno（2000）174）としての弁証法的思考なのである。

資料：1950年代のテクスト群[42]

『権威主義的パーソナリティ』（1950）
「ドイツ文化復興か？」（1950）
『ミニマ・モラリア』（1951）
「ドイツにおける経験的社会調査の現在の状況について」（1951）
「バッハをその愛好家から守る」（1951）
『ヴァーグナー試論』（1952）
「精神分析と社会理論との関係について」（1952）
「カフカについての覚書き」（1953）
「イデオロギーとしてのテレビ」（1953）
「無時間的モード，ジャズについて」（1953）
「イデオロギー論」（1954）
「現代小説の形式と内容」（1954）
『プリズメン』（1955）
『グループ実験』（1955），『経営環境（Betriebsklima）』
『不協和音』（1956）
『認識論のメタクリティーク』（1956）

「ハイネという傷」(1956)

『ヘーゲル哲学の諸局面』(1957)

「星は地に落ちて」(1957)

「叙事詩と社会についての講演」(1957)

パルシファル論(1957)

『文学ノート　1』(1958)

「ジュ・ド・ポーム美術館での走り書き」(1958)

『響の型』(1959)

「半教養の理論」(1959)

「過去の総括とは何を意味するのか」(1959)

「ドイツの大学の民主化」(1959)

「ペーター・ズーアカンプへの謝辞」(1959)

アドルノ全集 GS20.1, 2(Vermischte Schriften)に収録されているテクスト(未発表含む)は以下である(GS20 で分類されている分野順に昇順で表記)。

「『1900 年前後のベルリンの幼年時代』への後書き」(1950)

「民主主義的リーダーシップと大衆操作」(1950)

「ソ連と平和」(1950,未発表,ホルクハイマーとの共著)

「文化復興(Die auferstandene Kultur)」(1950)

「個人と国家」(1951,未発表)

「およそ真面目すぎて(Fast zu ernst)」(1951)

「公論と世論調査」(1952,未発表)

「ロドルフ・レーベンシュタイン『反ユダヤ主義の心理分析』」(1952 年頃,未発表)

「トーマス・マンへの想像上の挨拶」(1952,未発表)

「ダルムシュタット・ゲマインデ研究への序論」(1952 年 1 月)

「技術とヒューマニズムをめぐって」(1953)

「『大学と社会』をめぐる研究報告書への前書き」(1953)

「『1953,最も私の印象に残ったこと』」

「悲観論者が答える」(1954)

「素早く捉える(Im Flug erhascht)」(1954)

「ウィーンへのささやかな感謝」(1954/55)

「シュペングラーは正しく覚えられているのか?」(1955)

「マックス・ホルクハイマー」(1955)

「家族の問題について」(1955，未発表)

「哲学の研究について」(1955)

「『企業環境』と疎外」(1955，未発表)

「成人教育のアクチュアリティー」(1956)

「ハインツ・クリューガーの思い出」(1956)

「『ドイツ文学の十大小説は？』」(1956)

「ハインツ・クリューガー『文学形態としてのアフォリズムをめぐる研究』への序論について」(1957)

「『ロエブ・レクチャー』で語るショーレム」(1957)

「声の観相学（Physiognomik)」(1957)

「アドルノ / クリストフ・エーラー『研究に寄せる学生の期待への教育目標の依存』」(1957)

「オットー・ビュッシュ / ペーター・フルト『戦後ドイツにおける右派ラディカリズム』」(1958)

「ラインホルト・ツィッケル」(1958)

「ドイツの大学の民主化をめぐって」(1959，未発表)

「ペーター・ズーアカンプへの感謝」(1959)

「1959 年 10 月 11 日について」(未発表)

「カール・コルン『管理された世界における言語』」(1959)

《注》

（1） ここではさしあたり世代によって区分したが，たとえばホネットは思想の連続性，すなわち「後継者」云々の言説に対しては否定的である。

（2） とはいえ，「後継者たち」の存在や彼らの批判によってアドルノ思想の現代的意義が見出し難いと言うわけではなく，その点については議論と検証の余地が大いにある。

（3） 批判理論の「内部」という表現は，開かれた社会理論という批判理論の元来の意図からすれば語義矛盾だが，現実にはアドルノやハーバーマス，ホネットに特化した研究蓄積が進んでいる。もっとも，ハーバーマスにせよホネットにせよ，彼ら自身は他の異質な思想と好んで積極的に論争を重ねている。ハーバーマス―ルーマン論争やハーバーマス―ロールズ論争などを想起されたい。

（4） この『講演録』は，2020 年よりアドルノ・アルヒーフの管理を行なっている Michael Schwarz（IfS 研究助手）によって編集されているが，各講演のメモ書き（Stichworte zu den Vorträgen, S.501-588）も収録されている点で，アドルノがどのようなメモ書きをもとに講演を行なったか，窺い知れる批判的資料と考えられる。ちなみに，編注も各講演の成立の背景を詳述している。

（5） 戦後のアドルノに照準した先行研究としては以下がある。フランクフルト学派が戦後復興に果たした「知的再建」(とフランクフルト学派自体の形成）を描出した Albrecht et al.（1999)，真理政治という分析手法によってフランクフルト学派と戦後のドイツ社会学会および学生運動との関わりを活写した Demirović（1999）など。白銀（2019）も，アドルノの教育思想と戦後の教育実践を解明している。アドルノの社会理論や社会学の領域で戦後に議論を限定しているものは多くはない。本論文で主

に取り上げる「社会学のアクチュアリティー」を議論に含むものは，管見の限りほとんど存在しない（2021 年 8 月現在）。

（6） アドルノの亡命生活中の研究は山積しているが，オックスフォード大学への「移籍」にはケインズが関わり（アドルノの父親と知り合いだった），在籍中には I. バーリンと関わりがあったことが知られている。アドルノに対するバーリンの印象は良いものではなかったようだが，アドルノはホルクハイマー宛ての書簡でバーリンに 2 回言及している。一度目はバーリンのマルクス論を酷評しているが（1941 年 5 月 20 日）（AHB2，S.118），二度目はドイツ学術交流会（DAAD）の対象として G. ムーアや G. ライルなどと並んでバーリンを推薦し，このように述べている。バーリンは「初期マルクスについての本の著者，ドイツ語を完璧に話し，きわめて知的」（1951 年 8 月 23 日）（AHB4，S.41）。また，ロサンゼルスでの亡命者サークルとの関わりのなかから T. マンの『ファウスト博士』が誕生し，映画監督 F. ラングとの実りある交流が生まれたこともよく知られている（竹峰（2007））。

ちなみに，『ファウスト博士』誕生の経緯をマン自身が記した『ファウスト博士誕生』（1954.5）の翻訳書が日本におけるアドルノそのものへの言及の端緒と考えられる。『ファウスト博士誕生』におけるアドルノ初出は翻訳 38-43 頁に渡る。同訳書で初出人名には訳者による説明が割注で加えられているが，アドルノについては，『ファウスト博士』の成立に与えたアドルノの寄与ゆえか，マン自身がアドルノの履歴等について詳細な紹介を行なっている（ベンヤミンはアドルノの従兄弟など事実誤認はある）。アドルノへの言及を列挙すると以下のような次第である。

「アドルノ論稿〔『新音楽の哲学』〕には実際何か『重要なもの』があった。わたくしは極めて大きな進歩と精緻と深さとをかねそなえた芸術的＝社会学的な状況批評を見出した」（38 頁）。

「この注目すべき頭脳の持主は，哲学を職業にするか，それとも，音楽を職業にするかということの決定を，これまで終始拒否してきた。彼にとっては，自分がこの二つの異なる領域のなかで実は同一のものを追求しているのだ，ということは確かすぎて疑えないことだったのである」（39 頁）。

マンはアドルノをこのように評価している。「…いま，わたくしは，この章のためにつくしてくれた彼〔アドルノ〕の主要な功績は音楽の面にあるのではなくて，結局は道徳的なもの，宗教的なもの，神学的なものに言い寄る言語とそのニュアンスとの分野にある，と言いたいような気持がするのである」（191 頁，下線は訳書）。したがって，日本におけるアドルノ受容の最初期には，ただ音楽学者としてだけでなく，まずはマンの晩年の小説に多大な影響を与えた存在としてアドルノが認識された可能性がある。しかも，両者の交流を踏まえると当然のことではあるが，マンの紹介はアドルノの思考の特徴をかなりの程度的確に捉えたものと言える。

（7） なお，アドルノにとってのアメリカの両義性については，Offe（2004）の興味深い分析を参照されたい。

「カリフォルニアの亡命時代に経験され，把握されたアメリカは，全体主義的な事象化の前兆（あるいはまた単なる別形）であった。しかしながらフランクフルトでアメリカ経験を振り返ることで出てくるのは正反対の像，つまり自由なる文明の灯台としてのアメリカ合衆国という像である。ヨーロッパ，そして道徳的カタストローフに沈んだドイツはとくに，この自由の文明を引き受け，苦労して身につけなければならないというのである。こうした断絶，つまりアドルノのアメリカ像が真正面から対立していることが――私が正しければ，であるが――彼によって反省的に説明されたことは一度もない」（Offe（2004）115，109 頁）。

（8） アドルノはホルクハイマー宛の手紙（11 月 5 日）で，アリストテレスの政治学から始め，プラトンとアリストテレスの社会論を扱い，ブルジョア意識の基礎カテゴリーの幾つかを展開すると，講義の予定を書いている（AHB3，S.307-308）。

（9） アドルノの教育論については，近年研究の蓄積が進んでいる。白銀（2019）などを参照されたい。

（10） 訳注（127 頁）で示唆されている通り，〈主体への向け直し〉はかつて「過去の総括とは何を意味するのか」でこのように語られていた。「そもそもいかなる経験もなしえず，呼びかけられても聞く

耳をもたない」「〔生粋の反ユダヤ主義者に対しては〕むしろ議論を，語りかける相手の一人ひとりの主体へと向け直した方がよいでしょう。彼らに，自分自身の内にある人種的偏見を生み出しているメカニズムを自覚させるべきでしょう。啓蒙としての過去の総括は，本質的にそのように〔議論の矛先を〕主体へと向け直すこと（Wendung aufs Subjekt）であり，自己意識を強化し，そうして自己をも強化することです」（Adorno（1970）26-27，34 頁）。

(11) 行論中に 1960 年代の教育論に言及したことで唐突な印象を与えるかもしれないが，ドイツに帰還したアドルノの教育への熱心な取り組み，とりわけ“Bildung”ではなく“Erziehung”という語を好んだアドルノの教育への熱意はよく知られている。実際，『講演録』（2019）にも，「学生と彼らの期待への教育目標の依存」（1957.7.12）という講演が収録されている。

(12) すでに拙稿で述べたように，管見の限り両者の交流の記録は存在しない（表（2015））。

(13) アドルノには夢日記をつける習慣があったが，1948 年 12 月 6 日から 1952 年夏までは夢の記録がない（Adorno（2005）57-58）。帰還直前から社会研究所再建までのこの時期の繁忙さの表れかもしれない。

(14) ダルムシュタット工科大学（Technische Hochschule）で行なわれた帰国後初のこの講演で，アドルノは次のように述べている。「都市の表現は過去になったもの（Gewesene）であり，歴史として，過ぎ去ったもの（Vergangene）が現在から私たちに語りかけるものなのです」（Adorno（2019）9）。

(15) とはいえ，この講演のみを分析すれば十分というわけでもない。『講演録』に収録された，「今日の個人と社会の関係について」や「今日の人間的な社会」もまた検討の必要があるが，別稿を期したい。

(16) もっとも，アドルノの場合，同一の文言や表現などが時を経て用いられることはしばしばある。たとえば自然史の理念は，講演「自然史の理念」（1932）で初めて展開されたが，否定弁証法でも再度議論されている（GS6，S.347-351，429-435 頁）。また，「アクチュアリティー」というタイトルを付された講演は少なくとも 3 つ存在する。これらの他に，「成人教育のアクチュアリティー（1956，GS20.1，S.327-331）である。

(17) 編注によれば，この比喩の出所は『形而上学の根本概念』であり，そこでは次のように言われている。「根本において，そしてまず最初に，変遷したのは，問いの設定と，見る見方とであり ── これに続いて諸事実が発見されたのである。見ることと問うこととのこの変遷が常に科学における決定的なものなのである。ある学の偉大さとそれへの活気とはこの変遷への有能性のための力で示される。しかし，見ることと問うこととのこの変遷は，人がもしこれを立場の変更あるいはその学の社会学的諸条件の変動などと解するならば，それは誤解である。学におけるこのようなことに，たしかに今日では，多くの人が最も多くまた専一に関心を抱いている ── つまり学が心理学的および社会学的に規定されていることに。── しかしこういうことは外面的なことである。現実的な学とその哲学的理解とに対する社会学のこのような関係は，建築家 ── とまで言わなくても ── 実直な鳶職に対する壁づたい鼠顔負け泥棒（Fassadenkletterer）の関係のようなものである」（Heidegger（1992）379，411-412 頁）。

(18) アドルノと 1920 年代社会学（オッペンハイマーや G. ザロモン = ドゥラトゥーアなど）との関係については，拙稿（表（2015））を参照されたい。また，ヴァイマール期の社会学については，米沢（1991）や山本（1986）などを参照されたい。

(19) マンハイムなどの知識社会学に対するアドルノの批判はよく知られているが，カント哲学解釈のこうした例は知識社会学の存在拘束性などの分析視角を過度に矮小化したもののように思われる（編注によれば，該当箇所の表現は「新たな価値自由の社会学」や「知識社会学の意識」には見当たらないとのことである（Adorno（2019）598））。

(20) 上記引用箇所中に「計画」という表現が登場していることは注目されていい。戦後に多用された「計画」という観念と表象を，意外なことにアドルノも共有していた証左である。

(21) 「別の全体主義的システム」はソ連を指していると考えられる。ちなみに，1950 年にホルクハイ

マーと共同で執筆した「ソ連と平和」（未発表原稿）でもソ連批判が展開されている（GS 20.1, S.390-393）。

(22) より厳密には，アドルノは講演冒頭の該当箇所で「社会の自己省察」をこのように説明している。

「すなわち，目下のところ，人間が自分たちの間を支配し，生の生産と再生産を貫徹している連関を…人間がこうした諸々の連関を意識にもたらすことができれば，砂上の楼閣のようなまさにあの全くもって専制的なシステムは崩れ去るに違いないのです。他方で，その代わりに自由に創作された概念上の上部構造を築き上げられると，人間はかくも長きにわたり確実に感じてきたのです。」（Adorno（2019）31-32）。

社会システムに対するこうした視座は，のちのアドルノの社会理論における唯名論的側面であろう。1960 年代のアドルノ社会理論においては，唯名論的側面と実在論的側面の矛盾した結合が強調されるのだが，1951 年時点でのこうした視角はやや楽観的であるとともに，戦後社会そのものに胚胎された可能性の側面と評価できるだろう。同時期の『ミニマ・モラリア』においても，「何の不安もなくさまざまでありうること」というユートピアが描出されはしたが（GS4，S.116，147 頁），この講演のように社会の事象化あるいは眩惑連関（Verblendungszusammenhang）を解体し，新たな社会を形づくる可能性に言及することはなかった。ちなみに，後に事典項目として書かれた「社会」（1965）においては，明確に肯定的と言える論点は，市民社会の史的意味を辿り「第三身分の概念」に触れて述べられる連帯（Assoziation）の契機である。

(23) 編者はアドルノがここで「ダルムシュタット・ゲマインデ研究」や「グループ実験」を想起していると推測している（Adorno（2019）598）。

(24) この点は，この講演から 14 年後の事典項目「社会」における社会学理解と対照的である。そこでは，ヴェーバーとデュルケムを対比しながら，社会学は今や理解不可能なものを理解し，人類が非人間性へと歩み入る事態を理解しなければならないと言われている（GS8，S.12）。社会学理解のこの変化が，アドルノの現状認識の深化の反映なのか，事柄を裏面（「脱人間化」）から表現したものなのかが，問われねばならないだろう。

(25) アドルノがドイツ社会学の伝統への接続をこのように明言するのは珍しい。ここに，ヴェーバーやテンニエス，ジンメル，さらには彼が師事したオッペンハイマーやザロモン＝ドゥラトゥーアなど戦間期社会学との連続性を看取するのは容易だろう。

(26) 編者によると，リンドの『ミドルタウン』（1929）や『変容するミドルタウン』（1937）がダルムシュタット・ゲマインデ研究の模範になったとのことである（Adorno（2019）601）。

(27) 同プロジェクトの評価については，アドルノ研究だけではなく，社会調査史における P. ラザースフェルトの位置をも参照する必要があるだろう。両者の関係について，（アドルノについては若干の誤解があるものの）奥村（2013）などを参照されたい。

(28) ここでアドルノは，仮説立証のために出された，シンプソン（Adorno（2019）601）のような独創的なアイディアは到底思いつかないと称賛している（S.48）。

(29) メモ書きでも明確に社会学の統合（Integration）という表現が用いられている。社会という概念は，他の学問分野で取り扱われる数多くの諸問題を包摂する意味を持つという根本的な問題があるために，社会学にとっては，学問上の分業を乗り越えなければならない，と書かれている（Adorno（2019）517）。なお，興味深いことに，この課題が託されているのは，「社会科学（Sozialwissenschaft）」ではなく，「社会学」である（そのように訂正されている）。ここには，社会学の学際性の認識と戦後の社会研究所のプロジェクトの方向性を読み取ることができよう。また，1954 年以降の「社会」概念の彫琢は，この時期に始まっていたのかもしれない。さらなる検証が必要である。

(30) 編者によると，想定されているのは『集団の心理学』とのことである（Adorno（2019）602）。

(31) アドルノが労働組合に言及することは多くはない。この箇所では，「大企業の組織に対する労働組合組織の関係，ストライキが関わってくる客観的な諸問題やその種のあらゆる問題」に言及している（ebd.）。

(32) 上記引用箇所は，メモ書きには「主観的な行動様式の背後にある客観的な合法則性」（Adorno（2019）520）と書かれている。いずれにせよ，「社会学講義」（1968）におけるヴェーバー社会学の解釈と比較すれば，やや素朴な表現と思われる。

(33) アドルノはケーニヒらと単純な対立関係にあったわけではない。実際，『ケルン社会学・社会心理学雑誌』（KfSS）にアドルノは「イデオロギー論」（1954，GS8，S.457-477）を寄稿している。もっとも，同誌は第3回大会にてドイツ社会学会の機関誌に指定され（米沢（1991）150），アドルノの同論文は第12回ドイツ社会学会大会で発表されたものだったため，寄稿自体はさして例外的なことではない。また，ケーニヒが同誌の発行を引き受けたのは1955年のことである（メビウス（2019）199）。アドルノには，他にも同誌に掲載された論文がある。

(34) 第8回ドイツ社会学会大会（9月18日～21日）では大会テーマは設けられていなかった（Herrschaft / Lichtblau（2010）512）。

(35) もっとも，ドイツにおいて経験的社会調査が戦後に初めて実施された訳ではないことは言うまでもない（山本（1986）35-36）。

(36) ゲルプのゼミナールでアドルノとホルクハイマーは知り合ったのだから，こうした配慮が働いたとしても不自然ではないと思われる。

(37) 実際，ホルクハイマーと親しかったスイス出身の社会学者W. リュックは，ホルクハイマーのこうした申請が，「社会研究所でも学ぶ学生たちに社会学の教育を提供する」ためだったとインタビューで答えている（Rüegg（2010）286）。リュックは1955年に経済・社会科学部に着任している（S.288）。なお，同学部にはその後F. テンブルック（1962-67）とT. リュックマン（1965-70）が着任している（S.290-291）。

(38) Herrschaft（2010）は，ゼミ記録を丹念に調べて，ホルクハイマーもまた，アドルノやリュックと協働しながら，ヴェーバー論や階級概念や「経済と文化」などをテーマに社会学ゼミを開講していた事実を明らかにしている（Herrschaft（2010）227-233）。

(39) マールブルク新聞（1951年2月27日）によれば，この講演は，マールブルク大学の社会学ゼミナールが開催し，フランクフルト大学とダルムシュタット工科大学との共催だったとのことである（Adorno（2019）596）。

(40) 「社会学のアクチュアリティー」から6年後の講演「今日の個人と社会の関係について」で，アドルノは，「人間」という表現が第一次世界大戦直後やヴァイマール共和国初期にかつて持っていた特有の意味，すなわち「戦争に対して，まさに加えられたことに対して，硬化した諸関係や慣習に対して，人間の諸関係をふたたび自由に打ち立てる直接性」に言及している（Adorno（2019）121）。ホロコーストによる断絶を踏まえれば，アドルノが「人間の形成」という表現に全く同様の含意を込めているとは考え難いが，ただ，一定の可能性の領域を見出しているとは言えるだろう。

(41) R. ティーデマンによれば，『否定弁証法』の結実へと至る一連の講義は1960年から1966年にかけて行なわれている（Tiedemann（2003）337，351頁）。また，美学関連の講義は，1931/32年に行なわれた「美学の諸問題」ゼミを除けば，8回行なわれている（1950年，1950/51年，1955/56年，1958/59年，1961年，1961/62年，1967年，1967/68年）（Müller-Doohm（2003）944-950，757-762頁）。社会理論の彫琢は，講義のみで見れば，1960年の「哲学と社会学」講義から始まると見なしてよいだろう。1964年には「社会理論の哲学的エレメント」講義が行なわれ，1968年には「社会学入門」講義（邦訳題名「社会学講義」）が行なわれた。また，三度にわたり書かれた「社会」論（1954年の「社会」（Adorno（2003b）），1956年の『社会学的補遺』中の「社会」，1965年の「社会」（GS8，S.9-19））も，社会理論彫琢の一環とみなすことができよう。

(42) 以下の書籍・論文・講演類は，Müller-Doohm（2003）の年譜（S.933-937，748-750頁）とKlein / Kreuzer / Müller-Doohm（2011）のZeittafel（S.478-480）に依拠し，昇順で表記している。

参考文献

※訳文は断りなく変更を施している場合がある。

Adorno, Theodor W., (1970-1986) *Gesammelte Schriften*, hrsg. von Rolf Tiedemann unter Mitwirkung von G. Adorno / S. Buck-Morss / K. Schulz, Suhrkamp（= GS,〔 〕内は成立年）

1 = "Die Aktualität der Philosophie"〔1931〕（= 2011, 細見和之訳『哲学のアクチュアリティ』みすず書房 .）

4 = *Minima Moralia*〔1951〕（= 1979, 三光長治訳『ミニマ・モラリア』法政大学出版局 .）

6 = *Negative Dialektik*〔1966〕（= 1996, 木田元他訳『否定弁証法』作品社 .）

8 = *Soziologische Schriften Ⅰ*

10 = *Kulturkritik und Gesellschaft Ⅰ・Ⅱ*

20 = *Vermischte Schriften Ⅰ・Ⅱ*

_____ (1970) *Erziehung zur Mündigkeit*, hrsg. von G. Kadelbach, Suhrkamp（= 2011, 原千史・小田智敏・柿木伸之訳『自律への教育』中央公論新社 .）

_____ (2000) "Einleitung in dialektisches Denken: Stichworte zur letzten, abgebrochenen Vorlesung SS 1969" in: R. Tiedemann (Hrsg.), *Frankfurter Adorno Blätter VI*, München: edition text + kritik im Richard Boorberg Verlag

_____ (2003a) "Tagebuch der großen Reise, Oktober 1949" in: R. Tiedemann (Hrsg.), *Frankfurter Adorno Blätter VIII*, München: edition text + kritik im Richard Boorberg Verlag

_____ (2003b) "Gesellschaft: Erste Fassung eines Soziologischen Exkurses" in: *Frankfurter Adorno Blätter VIII*

_____ (2005) *Traumprotokolle*, Suhrkamp

_____ (2019) *Vorträge 1949-1968*, Suhrkamp

_____ / Max Horkheimer (2004-2006) *Briefwechsel 1927-1969*, hrsg. von Christoph Gödde und Henri Lonitz, Suhrkamp（= AHB,〔 〕内は執筆年）

Bd. 2〔1938-1944〕(2004)

Bd. 3〔1945-1949〕(2005)

Bd. 4〔1950-1969〕(2006)

Albrecht, Clemens / G. C. Behrmann / M. Bock / H. Homann / F. H. Tenbruck (1999) *Die intellektuelle Gründung der Bundesrepublik*, Campus

Demirović, Alex (1999) *Der nonkonformistische Intellektuelle*, Suhrkamp（= 2009, 太寿堂真他訳『戦後ドイツの「社会学」とフランクフルト学派』, 仲正昌樹責任編集『非体制順応的知識人』第 1 分冊, 御茶の水書房 .）

Heidegger, Martin (1992) *Die Grundbegriffe der Metaphysik*, Vittorio Klostermann, 2. Aufl（=1998, 川原栄峰・セヴェリン・ミュラー訳『形而上学の根本諸概念』創文社. ）

Herrschaft, Felicia (2010) "Die Lehrgestalt der Frankfurter Soziologie in den 1950er und 1960er Jahren" in: ders. und Lichtblau (Hrsg.) (2010) *Soziologie in Frankfurt*

_____ / Klaus Lichtblau (Hrsg.) (2010) *Soziologie in Frankfurt*, VS Verlag

Honneth, Axel (1985) *Kritik der Macht*, Suhrkamp（= 1992, 河上倫逸監訳『権力の批判』法政大学出版局 .）

Klein, Richard / J. Kreuzer / S. Müller-Doohm (hrsg.) (2011) *Adorno-Handbuch*, J.B. Metzler

マン, トーマス, 佐藤晃一訳 (1954)『ファウスト博士誕生』新潮社

メビウス, シュテファン, 梅村麦生訳 (2018)「『ケルン社会学・社会心理学雑誌』(KZfSS) にみる社会学の歴史 (上)」,『京都社会学年報』26

_____, 梅村麦生訳 (2019)「『ケルン社会学・社会心理学雑誌』(KZfSS) にみる社会学の歴史

（下）」，『京都社会学年報』27
Müller-Doohm, Stefan（1996）*Die Soziologie Theodor W. Adornos*, Campus Verlag
_____（2003）*Adorno: Eine Biographie*, Suhrkamp（= 2007，徳永恂監訳『アドルノ伝』作品社 .）
Offe, Claus（2004）*Selbstbetrachtung aus der Ferne*, Suhrkamp（= 2009，野口雅弘訳『アメリカの省察』法政大学出版局 .）
奥村隆（2013）「亡命者たちの社会学」，『応用社会学研究』55
表弘一郎（2015）「戦争のはざまの『社会学』」，『アリーナ』18
Rüegg, Walter（2010）“Natürlich hätte die Entwicklung einen ganz anderen Verlauf genommen, wenn Karl Mannheim nach dem Krieg nach Frankfurt zurückgekommen wäre.” in: Herrschaft und Lichtblau（Hrsg.）（2010）*Soziologie in Frankfurt*
白銀夏樹（2019）『アドルノの教育思想』関西学院大学出版会
竹峰義和（2007）『アドルノ，複製技術へのまなざし』青弓社
Tiedemann, Rolf（2003）“Nachbemerkung des Herausgebers” in: ders.,（Hrsg.）Theodor W. Adorno, *Vorlesung über negative Dialektik*, Suhrkamp（= 2007，細見和之・河原理・高安啓介訳『否定弁証法講義』作品社 .）
山本鎭雄（1986）『西ドイツ社会学の研究』恒星社厚生閣
安野正明（2005）「冷戦のなかの戦後復興」，若尾祐司・井上茂子編著『近代ドイツの歴史』ミネルヴァ書房
米沢和彦（1991）『ドイツ社会学史研究』恒星社厚生閣